

国際交通安全学会 20年のあゆみ 第2期（1985～1994）

社会貢献期と国際交流期

財国際交通安全学会は、1985年（昭和60年）11月から設立11年目、第2期の活動に入り、1994年（平成6年）10月、設立二十周年を迎えた。

学会第2期（1985～1994）の10年、国内にあっては、その活動を通して積極的に社会への発言を行い、日本の車社会向上を期した貢献の時期であった。

この期、延べ124本（うち受託研究43本）の研究プロジェクトのテーマは、いずれもその時代の問題意識を敏感に読み取り、人にやさしい道路交通の姿を模索した。その成果は、年々の一般公開報告において価値ある社会的な発言として注目された。

また三度にわたる国の長期計画策定に際しての提言は、学会が社会に向かって発進した数々のメッセージの集大成であった。

また、この第2期の10年、海外にむけては、道路

交通の未来を人類共通のテーマのもとで議論する国際的な場づくりを果たした国際交流の時期であった。

すなわちこの期、国際交流事業のメインプロジェクトとして遂行されたISIRTラウンドテーブルと日中交流事業は、学会の国際活動の新たな視点を具体的に展開したものであった。

研究調査活動の10年

1. 交通安全施設等整備事業五箇年計画への提案

昭和60年、国際交通安全学会は次年度から始まる国の第4次交通安全施設等整備事業五箇年計画の策定に際し、警察庁および建設省に対し提言を行った（提言委員長越正毅会員）。

折しも交通事故死者半減を記録した昭和54年を境に、55年以降、日本の安全施設整備が急激なモータリゼーション化に追いつかず、再び死者数の微増傾向が続いていた。道路交通の「安全性」を最優先するあまり「円滑性」を極度に押さえた時の交通行政に対し、改めて「円滑性」の重要さを説き、これを確保するための運転者の自律的な安全行動の高揚を唱えたこの提言は、公安委員会、道路管理者の長期事業計画策定に際して大きな示唆を与えた。

この提言がその後の交通行政の方向に少なからぬ



二十周年記念式典

影響を与えたことは、続く第5次、第6次の長期計画策定に際しても越委員長のもと提言委員会が生まれ、時の交通行政に対する提言を行う社会的な道筋を整えることとなった。

第5次交通安全施設等整備事業五箇年計画策定に際しての提言書は平成2年に、同じく警察庁、建設省に提出された。

第二次交通戦争といわれ、今や歴然としてきた交通事故の増大傾向を押しとどめるためには、科学的な交通事故分析体制を確立し、これに則った効果的な事故防止対策がたてられねばならぬことを提唱した「5次五計提言」は、交通事故総合分析センターの設立、車庫法、道路交通法の改正など、その後の交通行政に少なからぬ影響を与えたといえる。

2. 地域研究の地歩固め

「科学的な事故分析に基づく事故抑止対策を」と唱った「5次五計提言」の基本的理念は、「鈴鹿市の交通問題に関する研究」(プロジェクトリーダー越会員:鈴鹿市委託・平成2年)という地域研究プロジェクトとして具体化された。2年にわたるこの研究では、市内の事故多発箇所の綿密な探査に基づき、対策立案、実施、そして実施3年後に再びその事後評価研究が設定されるという地域研究の手法を確立した。

また、福井、宇都宮、東京圏に核をつくり、足で歩いて得たデータにより地道な地域比較研究を展開した「都市の道路交通改善—地域に根ざした視点から—」(プロジェクトリーダー中村英夫会員)は、「5次五計提言」の理念を実践的に支援した。

地方の時代といわれ、自治の行政といわれるなかで、これらの研究は学会が虚心に、かつ信ずるところを大胆に発言し、学会の地域研究取り組みの方向

性を見定めたものであった。

第6次交通安全施設等整備事業五箇年計画策定への提言研究は、くしくも学会設立20年の年に取り組みされている。

前次提言から5年、交通環境は一日とて止むことなく、大きく変化している。人的にも物的にも限られた資源を最大に生かし、人にやさしい交通環境を実現するために今次提言でどのような発言をしていくか、いま三たび越委員長のもとで真摯な議論が交わされている。

3. 研究ニーズの体系化

平成3年に入って、それまで多面的に取り上げられてきた研究プロジェクトのテーマを、社会のニーズに即して6分野のテーマにしぼり、それらのテーマのもとで年々の研究を積み重ねることによって、より熟成された成果をめざす方法がとられるようになった。

すなわち、・高齢者 ・安全 ・教育 ・交通社会の価値観変化とモビリティ ・情報 ・政策提言の6つの枠組みのもとで年ごとに具体的な研究テーマが企画され、各々の分野での成果の蓄積をいかに社会のニーズに応えるものにしてゆくかが追求されることとなったのである。

学会第2期の10年、100本にあまる研究調査プロジェクトが実施された。それらの一つひとつは、すぐれた問題意識のもと、良き指導者・メンバーを得て、世に認められる成果を残してきた。それらのすべてを記述することは、記録者の能くするところではない。

ただ、ご指導下さった諸先生方、ご協力いただいた各界の方々に対する感謝の意を記して銘し、本稿



IATSS懇話会／パトリック・ル・ケマン氏
(1993年10月2日)

に載せきれない研究の足跡をP.218からの付表にゆだねさせていただきます。

国際交流事業の10年

1. ISIRTラウンドテーブル

1988年、国際交流事業のメインプロジェクトとして、日米欧をつなぐ道路交通問題の討議の場、ISIRTラウンドテーブルが計画された。

このプロジェクトは、ISIRT日本委員会（International Scientific Initiatives on Road Traffic＝道路交通における国際的科学的イニシアチブ：委員長野口薫会員）と欧州、北欧5カ国の科学者らによって企画された3回にわたる国際会議である。

準備委員会には、日本側から野口委員長ほか越、中川、森地の各会員が参加し、欧州からオランダ・グローニンゲン大学交通研究所所長ミション教授、ドイツ連邦道路研究所クロイ教授、フランス国立交通研究所ジェラダン博士、スウェーデン国立道路研究所ルーマー教授、および英国バーミンガム大学マレー教授が参画した。

このラウンドテーブルは、交通に関わる様々な分野の研究者が一堂に会し、道路交通の将来に対して共通のテーマを学際的に討議するという、欧州では前例のない形のものとなった。

第1回ラウンドテーブルは、ミション実行委員長のもと、1989年10月オランダ・アッペルドーンにて開催された。世界10カ国から交通に関わる様々な分野の研究者45名が招かれ、交通科学の統合の可能性について3日間の集中討議が行われた。

討議の成果として、事故分析の世界的統合、速度の可変規制の有効性、及び運転者行動に対応した交

通システムの変革が提言としてまとめられた。

ISIRTの活動は専門分野別に細分化された従来への活動に大きなインパクトを与え、また各国の交通関係者の間で提言の質に対する高い評価を得た。その結果、これ以後の準備委員会へ北米からの代表者を迎え、世界規模での更なる活動への発展が求められることとなった。

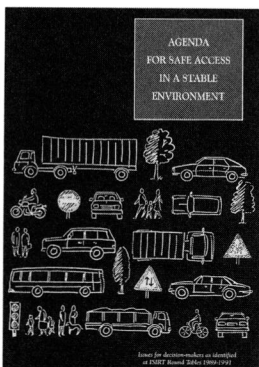
「オゾン層保護のためのウイーン条約」（1985）そして「モントリオール議定書採択」（1987）とドイツに始まった地道な環境活動は、西欧諸国を一連の環境問題のうねりの中に引き込み、“地球温暖化への対応”というキーワードで、道路交通の場にも従来とは異なる新たな視点からの対応を求めてくることとなった。

“環境”（の破壊）が“安全”（性への脅威）とともに、道路交通がもたらすもう一つのネガティブ要因として急浮上したのである。

第2回ラウンドテーブルは湾岸戦争のため1年遅れとなったが、これが逆に参加各国の問題意識の熟成と深化に時を与え、道路交通における環境問題への関心をいやが上にも高めることとなった。

1991年春、スウェーデン・ストックホルムで開催された第2回ラウンドテーブルでは、この新しい問題意識をたずさえた各国の道路交通問題の第一人者たちが熱心な議論を戦わせた。彼らはそれぞれ環境保護、自動車産業・技術、交通心理学、交通工学などの専門家たちであったが、このいまや人類共通のテーマを専門の垣を越えて討議し、緊迫した議論を重ねた。

その成果が「現状の環境レベルを維持するために



ISIRTラウンドテーブル報告書

“Agenda for Safe Access in a Stable Environment” (1993)

自動車の利用を減らすあらゆる努力と研究を進めるべきである」との提言に結実した。

これは、われわれ人類がモビリティの質量共の発展とともに享受してきた豊かさを、“環境”とのトレードオフのもとで改めて考え直す必要があることを認めた画期的な提言となった。

第3回ISIRTラウンドテーブルは、過去5年にわたるISIRT活動の集大成であった。

1991年秋、南フランス・トゥールーズに集まった科学者たちは、過去2回のISIRTラウンドテーブルで討議された問題、とりわけ第2回の「提言」を受け、将来に求められる望ましいモビリティの確保に関する討議を行った。

3日間の白熱した議論の末、この最終ラウンドテーブルは、「持続的道路交通安全の形態を確立するために (In order to establish a sustainable road traffic)、諸施策の導入に当たってはモビリティ・安全・環境面からのコスト評価を確立するとともに、社会へのより大きな利益をもたらすための交通手段の転換を促すあらゆる努力の必要性」を提言した。

過去5年にわたるISIRT活動は、当学会の全面的経済支援のもとに遂行されてきたが、この第3回ラウンドテーブルを最後にその支援から独立し、次の自立的活動へと展開の場を広げていくことになる。

国際交流事業のメインプロジェクトとして行われたISIRTラウンドテーブルの主張は、1990年から順次英文機関誌である“*IATSS RESEARCH*”に掲載された。

1993年には、5年間の討議内容の集大成記録がロンドン大学のアルソップ教授によってまとめられ、

HONDA MOTOR EUROPE CO.LTDのスポンサーシップにより英文・和文の小冊子として作製され、全世界に広く配布された。

2. 日中交流事業

1985年(昭和60年)にIATSS Reviewが実施した在日中国大使館・余仁泉参事官へのインタビューをきっかけに当学会と中国との交流が開始された。その年の6月、北京市公安局及び北京市交通工程学会による代表団が、わが国の交通状況の視察を目的に来日し、同年11月には警察庁を通じ、訪日中の中国公安部代表団との懇談会が当学会にて開催された。

さらに中国公安部からの正式な招聘を受け、12月、岡並木理事(現在当学会顧問)を団長に他4名による当学会代表団が訪中し、北京、上海をはじめとする中国の交通状況を視察し、中国の交通関係者との交流が本格的に開始された。また、この時に、のちに3回にわたって開催されることとなる日中交通管理學術討論会の計画が芽生え、その後現在に至るまで10年間にわたり、中国側からは方善慶氏(当時中国公安部交通管理局副技師長)を中心として交通の分野における日中友好関係が深められていった。

1986年、中国公安部を中心とする代表団が来日し、わが国の交通施設の視察、交通関係者との交流、さらに「混合交通下の円滑な交通法」「交通事故の予防と対策」等のテーマによる討論会が開催された。また、今後の日中交流については、両国の交通専門家が意見を交換し、学び合う場として、中国と日本で交互にシンポジウムを開催することが決定された。

1987年、中国・杭州市において第1回日中交通管理學術討論会が開催され、日本側からは鈴木辰雄常務理事(現在当学会顧問)を団長に4名の学会員、中国



第3回日中交通管理學術討論会
(北京・1990年)

側からは行政官、大学教授をはじめ約50名が参加。第1回は今後の討論会の基礎づくりと位置付けられ、主なテーマは「交通管理概論」「交通安全対策一人・施設・車両」「交通管制」「道路利用者の特性」等。

1988年、三重県鈴鹿市において第2回日中交通管理学術討論会が開催された。中国側からは公安部をはじめ各省、市より交通管理に携わる行政官9名が参加、日本側からは当学会、警察庁交通局、関係諸団体より約40名が参加した。第2回の主なテーマは「交通ネットワーク」「交通安全施設」「交通指導・取締り」「交通事故と統計解析」「交通安全広報と教育」「交通管理技術」「交通にかかわる法と制度」等、多岐にわたった。

1990年、中国・北京において開催された第3回日中交通管理学術討論会は過去2回の集大成と位置付けられ、第3回をもって当討論会は終了した。日本側からは高羽禎雄会員を団長に10名が参加した。主なテーマは、「交通安全教育」「総合的都市交通計画及び管理」「車の安全・公害」「高速道路の交通管理」。両国からの論文発表の後、①交通安全教育・広報と②総合交通管理の2つのグループに分かれ、さらに具体的な討論が行われた。

当学会と中国との国際交流は、過去3回にわたる討論会を通じ、両国の人々が交通安全という共通の社会問題に取り組み、相互理解を深めていった過程であるといえよう。その後も資料交換、個々の交通研究者との交流でもって、相互協力を続け今日に至っている。

褒賞活動の10年

1979年、設立5周年を機に第1回の授与が行われ

た国際交通安全学会賞は、現在第16回の選考が進められている。

当学会賞は、理想的な交通社会の実現に努力されている方々への褒賞と定義されているが、これまでの受賞業績を改めて見てみると、時代の変化と共に、その時々の特長が見いだせる。

1984年頃から委員会で取り上げられるテーマの中心は、施設建設、施設整備などのハード面から、広報、教育、交通システムといったソフト面を重視する傾向に変化していったと見ることができる。それに加えて近年では、環境、高齢者に関わる話題も数多く取り上げられている。また、都市を一つの総合的成果にとらえ、個々の業績を単独で評価するのではなく、それが全体のなかでどのように位置付けられ、機能しているかといった点も重要なポイントとなってきた。

また、施設建設、施設整備を対象としたものであっても、その技術だけを評価するのではなく、常に人の存在を不可欠なものとして評価した。人が触れることによってその施設やシステムが本来の機能を十分に発揮し得ることができるとし、業績によっては、2年、3年と経過したのちに、人々の生活の中に徐々に浸透し、根付いていったものも少なくない。

また、もう一つの視点は、“草の根”的ということである。一見、地味で目立たず光が当たりづらいが、よく見てみると大地にしっかり根をはって、非常に大切な役割を担っている業績についても、丹念に調査、視察を行ってきた。

さらに、一つの賞を授与することにより、同じような事業に携わる他の多くの人々に対しても励みとなるような波及効果を持つことも、評価要素の一つ



研究調査報告会・学会賞授賞式
(1994年)

として取り上げてきた。

一方、1981年に新設された著作部門についても、業績部門同様、ここにもまた、一つの傾向が見いだせる。

当初のまちづくり、都市づくりを中心としたものから、環境、特に都市環境をテーマとした著作が注目を集めてきた。さらにその後の大きな特長としては、都市、道路、車といったテーマを、技術的側面からのみ捉えるのではなく、歴史的、文化的色彩の濃い、専門分野を越えた学際的な著作が登場してきたことである。その内容は、深く掘り下げられ、広く言及されて、交通という専門分野にとどまらず、多くの人々に興味深く受け入れられている。

これは、もはや現代社会にとって欠くことのできない要素となった交通が、“交通文化”という一つのジャンルを形成してきた表れではないだろうか。

現在まで、業績部門23件、著作部門17件、論文部門22件の褒賞を行ってきたが、その間、資料収集、視察、現地ヒアリング等を通して、実際に事業に携わる全国各地の方々からご協力をいただき、また、委員会席上における議論のみでは得ることのできない多くのことを学ぶことができた。

「褒賞制度は、受けられる側の業績はもちろんのこと、差し上げる側の資格、基盤も問われている」という学会賞制定当初の思いを新たに、これからも国際交通安全学会に相応しい賞をめざして、さらに充実した褒賞活動を展開していきたいと考えている。

新しい出発

平成6年10月21日、財団法人国際交通安全学会は設立二十周年記念式典を挙行了した。

この日、会場の経団連会館は、20年の学会事業を

陰陽様々な形で支えて下さった各界の長老、指導者、実務者、研究者、ジャーナリスト、また日頃から交通に心を寄せておられる在野の人々などであふれかえった。そしてこれらの人々は、ひとしく暖かい祝福と将来への激励を言葉にして下さった。

この日会場に集まった人々は、日本の道路からひとりでも犠牲者を少なくしたいという学会の設立当初からの願いを共にし、その実現のために惜しみないシュプレヒコールを送って下さった方々であった。

居合わせた多くの者にとって、式典は、学会に対する「警察庁長官感謝状」の授与をもって、いやまさに学会の使命の重大さをかみしめる時となった。

なぜなら、財団法人国際交通安全学会の足跡は、そこに直接的に関与した者たちだけのものではなく、日本各地から、また世界各地から、学会の理念に賛同して馳せ参じたすべての人々の行為の結晶に他ならないからであった。

ひとつの組織が誕生20年を迎えるということは、それなりの重さを持つことである。人なら、成人式を迎え、社会人として生きてゆく知恵を身に包むことになる。そのことはまた、多くの困難な道のりの出発をも意味しよう。その時人はいまだ定かならぬ道程を前にして、改めて幼ない日のみずみずしい心を取り戻し、大地を踏みしめる糧としないだろうか。

設立20年を迎え、財団法人国際交通安全学会も初心に還る。設立の理念を復誦してみる。諸先輩の偉業を引き継ぎ、明日の交通社会のより良き姿を実現するために、そのための一助となるために、いまわれわれにできることは何か。虚心坦懐に時代の声に耳を傾け、思いをめぐらす。そして、責務を引き受け、21年目の第一歩を踏み出す。

学会第2期(1985~1994)のあゆみ

研究調査事業 (*印は受託研究)	年	国際交流事業
<ul style="list-style-type: none"> *自動車交通災害及び後処理システムの最適化 ・市民参加型安全キャンペーンモデルの提言 ・人-車系における目-頭-車の協応動作 ・トランジットモールの研究 ・交通と通信の関係をめぐる研究 ・自動操縦に関する研究 ・路面公共輸送の道路優先システムに関する研究 ・国の4次五計策定に際しての提言研究 *自動車の安全に必要な高度の技能・知識に関する研修の研究 <ul style="list-style-type: none"> A. 中央研修所における教育担当者の養成カリキュラムの研究 B. 機器・器材を用いた高度な安全運転教育の授業設計研究 	1984年／ 昭和59年	
<ul style="list-style-type: none"> *聴力が運転に及ぼす影響に関する調査研究 ・飲酒運転に関する調査研究 ・ニューメディアの交通と通信に与えるインパクト ・交通における文化的諸要因の国際比較 ・Kiss & Rideの研究 *高齢ドライバーの交通環境に関する調査研究 *歩行者事故に関する調査研究 ・省エネルギーに関する予備研究 *自動車の安全に必要な高度の技能・知識に関する研修の研究 <ul style="list-style-type: none"> A. 中央研修所における教育担当者養成プログラムの研究 B. 中央研修所における二輪車交通教育の研究 ・高密度空間のわかち合い ・高齢化社会における自動車交通のあり方 ・高校における二輪車交通教育についての具体的実施策 ・市民参加型安全キャンペーンモデルの研究 ・人-車系における目-頭-車の協応動作 ・トランジットモールの研究 ・自動操縦に関する研究 	1985年／ 昭和60年	<ul style="list-style-type: none"> ・北京市公安局来日 ・IATSS代表団訪中
<ul style="list-style-type: none"> *超大型自動車の運転特性に関する調査研究 *二輪車事故対策に関する調査研究 ・景観に関する研究 *自動車の安全に必要な高度の技能・知識に関する研修の研究 <ul style="list-style-type: none"> A. 交通安全指導者のための研究カリキュラム(その1) B. 交通取締用二輪車乗務員の研究カリキュラムの研究 ・高校における二輪車交通教育についての具体的実施策 ・市民参加型安全キャンペーンモデルの研究 ・人-車系における目-頭-車の協応動作 ・トランジットモールの研究 ・自動操縦に関する研究 ・飲酒運転に関する調査研究 ・ニューメディアの交通と通信に与えるインパクト ・交通における文化的諸要因の国際比較 ・Kiss & Rideの研究 *歩行者事故に関する調査研究 	1986年／ 昭和61年	<ul style="list-style-type: none"> ・中国都市交通工程学会準備委員会代表団来日
<ul style="list-style-type: none"> *色覚異常が運転に及ぼす影響に関する調査研究 ・渋滞の研究 ・Road Pricingの研究 ・文化遺産としての街路 ・日本人と土地 ・これからの交通教育のあり方 *交通安全教育の体系化に関する調査研究 ・トランジットモールの研究 	1987年／ 昭和62年	<ul style="list-style-type: none"> ・第1回日中交通管理學術討論会(中国・杭州)

褒賞事業（国際交通安全学会賞）	学会誌特集記事	その他
<p>業績部門</p> <ul style="list-style-type: none"> 長野市の交通施設整備を中心とした総合的街づくり（長野県／長野市） <p>著作部門</p> <ul style="list-style-type: none"> 都市問題の系譜（磯村英一） 続・街並みの美学（芦原義信） <p>論文部門</p> <ul style="list-style-type: none"> 高速道路トンネルの交通現象（越正毅） 住区内街路に生ずる交通の類型化と特性分析（竹内伝史／高木俊二） 二輪車の事故事例分析とそれに基づいた運転者教育の提言（長山泰久） 	<ul style="list-style-type: none"> トンネルと交通 交通情報 運転者教育 歩行行動 	<ul style="list-style-type: none"> 会長：八十島義之助（～H2） 副会長：岡村總吾（～H2） 副会長：千々岩雄平（～H1） 専務理事：滝田一成（～H2） 常務理事：鈴木辰雄（～H2） IATSSフォーラム 開講（鈴鹿）
<p>業績部門</p> <ul style="list-style-type: none"> よみがえった清流：小松川境川親水公園の完成（東京都江戸川区） 歴史的町並みを生かした町づくり（鹿児島県知覧町） <p>論文部門</p> <ul style="list-style-type: none"> 交通環境における歩行行動（中村和男／小林實） 	<ul style="list-style-type: none"> 保険と交通 交通と食生活 信仰と交通 交通の質 	
<p>業績部門</p> <ul style="list-style-type: none"> 交通条件を改善し“交流の輪”を広げる村づくり（岩手県田野畑村） <p>著作部門</p> <ul style="list-style-type: none"> 暴走族のエスノグラフィー（佐藤郁哉） こどものあそび環境（仙田満） 都市に森をつくるー私の公園学ー（半田真理子） <p>論文部門</p> <ul style="list-style-type: none"> 発展途上国の都市交通政策の一視点ー都市貧困層の交通特性と政策ー（太田勝敏） 	<ul style="list-style-type: none"> 国際化の中の交通問題 駐車問題 公共交通のデザイン 大都市通勤交通の課題 	
<p>業績部門</p> <ul style="list-style-type: none"> 幹線道路の円滑化を図る“グリーンウェーブシステム”の構築（埼玉県警察本部） <p>著作部門</p> <ul style="list-style-type: none"> 交通安全の研究（中島源雄） 	<ul style="list-style-type: none"> 交通におけるライフサイクル 飲酒と交通 キス&ライド 	

研究調査事業（*印は受託研究）	年	国際交流事業
<ul style="list-style-type: none"> * 自動車の安全に必要な高度の技能・知識に関する研修の研究 <ul style="list-style-type: none"> A. 交通安全指導者のための研究カリキュラム（その2） B. 安全運転中央研修所における国際過程の研究 ・自動操縦の研究 ・交通における文化的諸要因の国際比較 * 二輪車事故対策に関する調査研究 		
<ul style="list-style-type: none"> * 二輪車運転者教育の効果的な実施に関する調査研究 * 高齢歩行者等の事故防止に関する調査研究 <ul style="list-style-type: none"> ・高速社会の自動車進化論 ・自動車の走行速度を規定する要因に関する調査研究 ・L R T 導入の事後評価 ・諸外国の暫定免許制度を中心とした免許行政 * 自動車の安全に必要な高度の技能・知識に関する研修の研究 <ul style="list-style-type: none"> A. 中央研修所研修生の基礎資料並びに評価に関する調査研究 B. 中央研修所における研修の効果的推進方策に関する研究 * 二輪車事故対策に関する調査研究 <ul style="list-style-type: none"> ・渋滞の研究 ・Road Pricingの研究 ・文化遺産としての街路 ・日本人と土地 * 交通安全教育の体系化に関する調査研究 ・交通における文化的諸要因の国際比較 	1988年／ 昭和63年	<ul style="list-style-type: none"> ・ISIRTラウンドテーブル 日本委員会設立 ・第2回日中交通管理學術討論会 （日本・鈴鹿）
<ul style="list-style-type: none"> * 交通安全総合教育システムづくりのための調査研究 <ul style="list-style-type: none"> ・大都市における道路交通システムの可能性 ・交通のバイオシステム ・国の5次五計策定に際しての提言研究 * 都市交通対策のための調査研究－地区交通の計画と設計－ * 円滑化対策による経済波及効果に関する調査研究（4次五計の評価） * 交通安全事業の施策等に関する評価調査 <ul style="list-style-type: none"> ・都市の交通改善－地域に根ざした視点から－ * 自転車事故に関する研究 <ul style="list-style-type: none"> ・交通統計の高度化方策に関する研究 * 危険運転者に対する効果的再教育に関する研究 * 自動車の安全に必要な高度の技能・知識に関する研修の研究 <ul style="list-style-type: none"> －少年交通安全研修カリキュラムの研究－ ・自動車の走行速度を規定する要因に関する調査研究 ・L R T 導入の事後評価 ・交通規範とキャンペーンの研究 	1989年／ 平成1年	<ul style="list-style-type: none"> ・第1回ISIRTラウンドテーブル （安全）
<ul style="list-style-type: none"> * 高齢者事故並びに高校生の自転車通学問題に関する研究 * 鈴鹿市の交通問題に関する研究 <ul style="list-style-type: none"> ・ドライバーの交通規範意識に関する研究 ・新自転車教育システムの研究 ・シミュレーターを活用した運転教育の研究 ・自転車事故に関する研究 * 交通規制と路面改良の組合せによる交通事故抑止対策に関する調査研究 * 都市交通対策のための調査研究 <ul style="list-style-type: none"> －道路交通における公共輸送利用促進に関する調査研究－ * 高齢ドライバーの人的事故要因に関する調査研究 * 自動車の安全に必要な高度の技能・知識に関する研修の研究 <ul style="list-style-type: none"> －交通危険学の研究－ ・自動車の走行速度を規定する要因に関する調査研究 ・大都市における道路交通システムの可能性 ・交通のバイオシステム ・都市の交通改善－地域に根ざした視点から－ ・交通統計の高度化方策に関する研究 ・交通規範とキャンペーンの研究 	1990年／ 平成2年	<ul style="list-style-type: none"> ・第3回日中交通管理學術討論会 （中国・北京）

褒賞事業（国際交通安全学会賞）	学会誌特集記事	その他
論文部門 ・ランドスケープとしての交通空間（小柳武和） ・大都市商業地における駐車問題とその解決策（高田邦道）		
業績部門 ・21世紀の仙台都市圏を支える地下鉄システムの構築（仙台市） ・津軽を首都圏と結ぶ長距離高速バス「ノクターン」号 （弘南バス㈱／京浜急行電鉄㈱） 著作部門 ・豊かな都市環境を求めて（加藤三郎） ・都市の人間環境（品田稔／立花直美／杉山恵一） ・ネオ・バロックの灯：四谷見附橋物語 （新谷洋二／田島二郎／伊東孝／昌子住江／窪田陽一） 論文部門 ・交通拠点のライフサイクル（月尾嘉男） ・キス＆ライドの実態分析と今後の動向 （内山久雄／山川仁／福田敦）	・瀬戸大橋 ・複合的交通手段利用の現状と将来 ・中国の道路交通 ・交通安全と文化的要因	
業績部門 ・25年間、27億人を無事故で運んだ新幹線 （新幹線JRグループ） 著作部門 ・ローマの道の物語／ローマの道 遍歴と散策（藤原武） ・東アジア鉄道国際関係史（井上勇一） 論文部門 ・欧米の道路交通法にみる考え方（富永誠美）	・ニューフロンティアと交通 ・明日の物流 ・東南アジア ・ロードプライシング	・副会長：鈴木正利 （～H2）
業績部門 ・日本で初の幼・小・中・高一貫した実践的安全教育 ー実った先生・生徒一体の努力ー（学校法人生光学園） ・青函連絡船廃止後のターミナル区域の再生（函館市） 論文部門 ・高齢ドライバーと高齢歩行者の交通特性について（溝端光雄） ・Explanation of and Countermeasures Against Traffic Congestion ー渋滞のメカニズムと対策ー（越正毅／赤羽弘和／桑原雅夫）	・次世代都市構想の中の交通システム ・交通とアメニティ ・クリーンカーの展望 ・運転と適性	・会長：岡村總吾 （～H6現在） ・副会長：新谷洋二 （～H3） ・副会長：岩井陸 （～H5） ・専務理事：三上和幸 （～H6現在） ・常務理事：木村敦 （～H6現在）

研究調査事業（*印は受託研究）	年	国際交流事業
<ul style="list-style-type: none"> * 地域交通改善のための予備研究 * 交差点事故に関する調査 ・ 超安全自動車のソーシャル・バリューに関する研究 ・ 交通社会の価値観変化と自動車モビリティ 1 <ul style="list-style-type: none"> －路上駐車の世界ルールを求めて－ ・ カー・ボディ・ランゲージの研究 ・ 都市の交通改善－地域に根ざした視点から－ * 鈴鹿市の交通問題に関する研究 ・ ドライバーの交通規範に関する研究 ・ 新自転車教育システムの研究 ・ シミュレータを活用した運転教育の研究 * 都市交通対策のための調査研究 <ul style="list-style-type: none"> －道路交通における公共輸送利用促進に関する調査研究－ * 高齢ドライバーの人的事故要因に関する調査研究 ・ 交通統計の高度化方策に関する研究 	1991年／平成 3 年	<ul style="list-style-type: none"> ・ 第 2 回 ISIRT ラウンドテーブル（環境） ・ 第 3 回 ISIRT ラウンドテーブル（モビリティ）
<ul style="list-style-type: none"> ・ 高齢者と混合交通 ・ 超安全のソーシャル・バリューに関する研究 <ul style="list-style-type: none"> －交通施策の評価について－ ・ 交通社会の価値観変化と自動車モビリティ 2－週休 2 日制の研究－ ・ 高校生に対する交通教育の一方策 ・ カー・ボディ・ランゲージに関する研究－自動車の情報化と安全性－ * 高齢ドライバーの人的事故要因に関する調査研究 	1992年／平成 4 年	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 高齢者のモビリティと安全性に関する調査研究 ・ 交通事故とミスマッチ ・ 都市のライフスタイルとオートモビリティ ・ 安全教育についての技術的側面からの研究 ・ 6 次五計提言のための予備調査研究 ・ 道路交通の問題解決型リサーチニーズの体系的整理 ・ 情報の与え方と安全性に関する調査研究 * 外国人運転者に対する運転者教育のあり方に関する調査研究 	1993年／平成 5 年	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 高齢化社会における生活構造とモビリティに関する調査研究 ・ 女性職業ドライバーに関する調査研究 ・ 地域コミュニティからみた交通マネジメント等交通改善に関する研究 ・ 歩行者、自転車乗用時に対する運転経験の効果に関する研究 ・ 情報の与え方と安全性に関する調査研究 ・ 国の 6 次五計策定に際しての提言研究 * 交通需要マネジメント等に関する調査研究 <ul style="list-style-type: none"> －都市における交通管理手法のあり方に関する調査研究－ * 二輪車の交通環境改善に向けての研究 	1994年／平成 6 年	

褒賞事業（国際交通安全学会賞）	学会誌特集記事	その他
業績部門 ・新技術と市民の協力による違法駐車排除作戦（福岡県警察） 著作部門 ・都市圏 発展の構図（依田和夫） 論文部門 ・適性検査をめぐる諸問題（吉田信彌） ・絵本にみる交通（延藤安弘）	・高速交通社会の行方 ・自動車情報化システム ・遊びと交通 ・交通事故関連研究プロジェクト	・副会長：越正毅 （～H 6 現在）
業績部門 ・海外における交通安全へのたゆまぬ取り組み （国際協力事業団青年海外協力隊） ・新千歳空港駅のコンセプトとデザイン（J R 北海道） 著作部門 ・道のはなしⅠ・Ⅱ（武部健一）	・自転車 ・乗り物とシミュレータ ・都市内バス輸送の将来 ・リスク管理	
業績部門 ・県民と一体となって進める交通安全教育—山口県総合交通センター—（山口県警察本部） ・世界の電車が走る街—地方都市の活性化と国際親善—（土佐電気鉄道㈱） 著作部門 ・轍の文化史—人力車から自動車への道—（齋藤俊彦） 論文部門 ・海上交通とリスク管理（喜多秀行） ・休日交通の実態と道路計画上の問題点（中村英樹）	・生涯教育としての交通安全教育 ・余暇と交通 ・ISIRTラウンドテーブル ・安全の概念	・副会長：宮田勝 （～H 6 現在）
	・わが国の交通安全史 ・自動車行政と規制緩和 ・高齢社会と交通 ・学会設立二十周年記念	・設立二十周年記念式典 ・警察庁長官感謝状授与さる